

お盆にまつわるQ&A

監修・帰依龍照(きえりゅうしょう)

今年もお盆がやってきました。ご先祖さまをお迎えする準備は万端でしょうか？

今回は、お盆にまつわる小さなギモンについて、「年中行事Q&A」のコーナーでおなじみの

球陽寺・前住職・帰依龍照さんに教えていただきました。



Q

あの世のお金というウチカビ(打紙)は、どれくらいお送りすれば(燃やせば)いいのでしょうか？ 今年も、宝くじにあやかっで、7億円分ほど送ってみようかと思っています。ご先祖さまがびっくりされるから、やめたほうがいいですか？

確かに、金額は気になりますね。とある計算方法では、昔の貨幣である1モン(文)を、現代の約20円と

仮定したとき(あくまでも仮定です)、1モンが1000枚で1グワンモン(貫文)になり、約2万円。ウチカビ1束・5枚では、5マンガワンモンになり、現代の約10億円(!!)に相当することになるのだそうです。まあ、あくまでも、「とある計算方法」なので、ご参考まで。

ご先祖さまも、いきなり大金だとびっくりされることでしょうか「○○マンガワン、カビアンジしましょうね」と、先にご報



告した方がいいかもしれませんね。

ところで、ウチカビは「燃やす」のではなく、「カビアンジャー」とも言うように、「炙(あぶる)」という表現を重んじます。炙っている途中でウチカビが消えてしまうと、「グソーのナナジョー(イチミとグソーを繋ぐと考えられる7つの門)が閉まる」と話す先輩方もおられますので、門が閉まらないように、連続して炙ることが大切という考え方がるようです。

Q

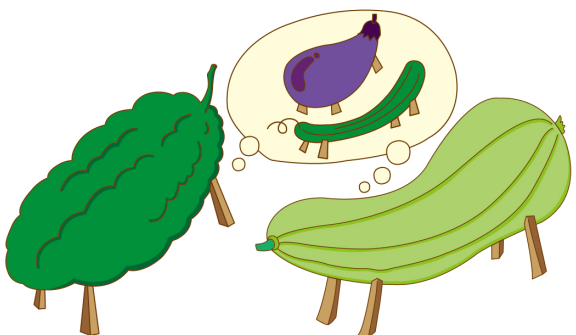
お供えのグーサンウージ(さとうきび)は、あちらに帰る際の杖と聞きました。県外では、早くこちらに戻ってくるようにと、キュウリの馬、ゆっくりあちらに戻れるようにナスの牛を用意するそうですが、沖縄のご先祖さまは、徒歩で行き来されるのでしょうか？ 乗り物を用意してあげたいと思うのですが、どうしたらいいでしょうか？

私の知る限りでは、沖縄のご先祖さまが「この乗り物を利用して」という

学術的な文献は、見当たらないようです。どんな乗り物なのか、私も非常に興味があるのですが…。

昨年、あるおうちでグーヤーとナーベラーで作られた馬と牛を拝見しました。キュウリとナスが夏野菜なので、沖縄の夏野菜の代表であるグーヤーとナーベラーを使われたのでしょうか。これは、いいアイデアだなと思いました。グーヤーとナーベラー、どちらも馬のようであり、牛のようでもあり、とてもかわいらしいものでした。うーん、どっちが馬だったんだろう？

ちなみに、旧盆を含む年中行事の際、「部屋の中に入ってくる蝶(ちょう)は、ウヤファーフジがグソーから帰省している証である」



という説もあります(ウヤファーフジは、蝶に乗って帰ってくるという解釈。トンボや鳥などとする地域や家庭もあります)。

いずれにしても、お盆に際して、乗り物を用意してあげたいと思う気持ちが、ご先祖様への深い思いを示しているようで、ありがたいお話ですね。

Q

実家では、ウーケイの際、家を出た先の路地までみんなで歩いて見送っていました。でも、婚家では玄関先で、「また来年ねー」と挨拶して終わりです。なんか、ちょっと寂しいのですが…。

Q

5歳の息子にウチカビの意味を教えたら、「おじいちゃんが好きだった車をあげる」といって、自分で描いた絵を燃やして（炙って）あげたいと言います。こういう贈り物もアリでしょうか。

A

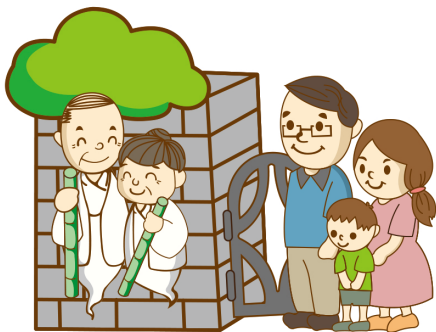
「なるべく速くまで」という思いがあり、婚家での見送りには、「別れの時間はあるだけ短く」という思いがあるわけで、どちらも素晴らしいと思います。婚家の玄関先で見送りされる時、「実家だったら、あの辺りまで歩いていくだろうな」という場所まで、視線をそちらに向けて見送る方法があってもよいかもしれませんね。「見送り」は、

A

「目（め）送り」ということで、嘘（まぶた）越しに見送るという意味があるようですから。

「アリですね！ 実にいい発想をお持ちのお子さまですね。ウチカビは「ウヤフアーフジを忘れず、敬っています」という思いの表れだという先輩方もおられます。大切なのは、「おじいちゃんが好きだったものを…」という息子さんの気持ちです。生前好きだったものを準備することが、お供え物の原点でもありますので。お子さまが一生懸命に描いてくれた絵を炙りなが

ら、笑顔で受け取ってもらおじいちゃんを思い出しつつ、心温まる旧盆をお過ごしくださいね。

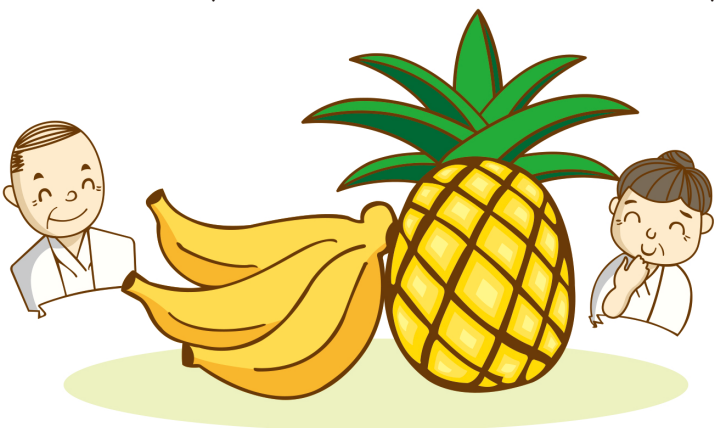


Q

物がなかった時代は、どんなものをお供えしていたのですか？ 今はパイナップルやバナナなどが一般的ですが、その意味も知りたいです。

A

重箱やお膳料理を中心に、お菓子類や団子などをお供えしていたと聞きます。それ以前は、山海の珍味といわれるので、塩（マース）やお米（ハナグミ）も含まれていたと思われます。また、果物を供えるのは、その色彩に故人の人生を表す意味があるからともされています。紅（あか）は故人の人生の誕生を、白は人生の終焉を、紫はご苦労を、黄色は幸福を表しているそうです。このことから、パイナップルやバナナの黄色は、故人の幸福を表しているという説があります。



お盆の由来

お盆の正式な名称は、孟蘭盆会（うらぼんえ）といい、インドの昔の言葉であるサンスクリット語では、「ウランバーナ」といわれます。ウランバーナとは、お釈迦様の弟子のモッガラーナの亡き母親が、餓鬼という迷いの世界に落ちていたときの苦しみ意味する言葉。モッガラーナは母を救うために、修行を終えた僧侶に食べ物や飲み物を献上しました。この献上品が、今でいうお盆のお供え物にあたる考えられています。また、モッガラーナは母親が救われたとき、喜びのあまり飛び跳ねて踊り回ったとか。これを盆踊りの始まりとする説もあり、広い意味では沖縄の念仏踊りであるエイサーの由来といえるかもしれません。

